真宗大谷派岐阜教区

岐阜同朋 ぎふどうぼう

●生きるって どういうこと（二階堂行邦先生にインタビュー②）
●吉崎御坊跡～中興の祖「蓮如上人」布教の地～
●今を見る 今を問う　●My Book
●仏前結婚式について

2011.03 104

希くは今日より以後、両名相携えて……（仏前結婚式）

仏前結婚式について

結婚にあたり、今やいろいろな場所や形式で結婚式が執り行われています。そんな中、阿弥陀如来の尊前で新しい門出を誓う仏前結婚式について、御紹介します。

仏前結婚式はお寺の本堂はもとより、別院本堂、また家庭の仏間でも執り行うことができます。結婚式のことを「華燭の典」といいますが、真宗の結婚式はその名にふさわしく厳粛華麗な式典であります。

荘厳は、打敷（緋の地色に雲鶴や鳳凰、あるいは松竹梅の模様など華麗なものがよい）をかけ、花は松一式（松の葉のみをそろえてさし、これに白赤の色彩を施したもの）、または若松の真に色花を挿し交ぜたものをたてます。そして紅白の鏡餅を本尊の前に一対そなえ、金色か朱色の蝋燭を使用します。

大谷派が定める結婚式次第は次の様ですが、家庭で仏前結婚式を行う場合はこの式次第を基本として、事情にあわせて変えて行ってもよいとされています。

一、入堂
二、開式のことば
三、総礼
四、表白・勤行
五、司婚のことば
六、誓いのことば
七、念珠授与
八、新郎新婦献花・焼香
九、新郎新婦交杯
十、親族交杯
十一、総礼
十二、閉式のことば
十三、退出

式次第に応じた曲を雅楽が奏でる調べのもとに進行される仏前結婚式、寺族に限らず、門徒の方も本尊の前にて縁を紡いでいくのはいかがでしょう。

【参考文献】『大谷派寺院年中諸法要行事』 川島真量著 法蔵館
『うちのお寺は真宗大谷派』 坂東浩監修 双葉社

編集後記

年が明け親鸞聖人の御遠忌の年を迎えた。五十年に一度の御遠忌だと宗門はお迎えの準備に追われている。

一寺院の住職としてご門徒さんを誘い、多くの皆さんと一緒に団体参拝もするが、僧分という立場に立てば、宗祖の教えを分かったつもりになって利用しているのかもしれない。すなわち、御遠忌という大事業を成し遂げようとしている宗門に、足並みを揃えているだけのことである。

私自身が本当に宗祖に出遇うことも、御遠忌に出会うことも、望んでいないのではないかとさえ感じる。

南無阿弥陀仏の教えが届かない自分をごまかさずに見つめ、自分を問うところから、宗祖の御遠忌が始まるのではなかろうか。喧噪には惑わされず、聞法の原点に立ちたいと思う。

（里雄敬意）

発行：岐阜教区教化委員会　真宗大谷派岐阜教務所　橘 秀憲　〒500-8054 岐阜市大門町1　TEL.058-266-1378　編集：岐阜同朋編集委員会

生きるってどういうこと

二階堂行邦先生に2インタビュー

自分が自分になる

「自分が自分になる」という問題は、私にとって少年の頃からの大きな課題でもありました。80年生きてきた中で、今も無くならない。それは自分の慢心です。いつも人と比べてばっかりいたんですね。それを仏教では「慢」というんです。人間が人間だけを相手にしていると、自分と人を比べることで相手を評価したり、自分を評価したりするんです。人と自分を比べて、そのものさしで全てを計っていた。そういうものさしで、自分を評価し、また相手も評価していたが、そうではなく、みんな一人ひとり、尊いいのちを生き自分が自分になる、自信をもって生きる、そこに慢心が破られていくのではということを近頃改めて思うんですね。

「人間は凡夫という分限を忘れている。自分の思いが何でもできると思い込んでいる。それは過信です。人間は褒められると優越感、貶されると劣等感に堕ちる。傲慢になるか卑屈になるかどっちかです。しかし、よく考えれば、人間は全て凡夫なのだ。そのことは教えを聴かないとわからない」と安田理深師も言われます。凡夫に呼びかえされた凡夫と、ただの凡夫とは違うんですね。呼びかえされた凡夫は分限を知った、教えを知った凡夫だと。それはそのまま無限を実現する場所となっている凡夫であると。凡夫の上に阿弥陀仏という無限が実現する。そのように凡夫も二つあるんだと表現されます。

脳死について

今、家族の同意だけで脳死が認められ、臓器移植が行われるようになったが、脳死を賛成・反対どちらと簡単に言えるわけではないんですけど、どちらかと問われれば私は反対ですね。

この間テレビでやっていたんですが、本人は脳死による臓器移植も決断できないから、家族が相談している。医者は家族に臓器を提供してほしいと。はじめは家族も反対していたんですが、いろいろ聞いて、家族がみんなで相談して脳死扱いにしてもらった。そして8人の人たちに臓器を提供した。

するとその人たちからお礼状がいっぱい来て、それで、「ああ良いことをした」、「人のためになった」ということで喜んでいた。

ところが移植を勧めたお医者さんですが、はじめは医者として、臓器を提供してもらえれば亡くなる人も人のためになると考えていた。ところが、患者さんの家族が来て、「(本人を)退院させてほしい。もう先が短いから。」と言われたんですね。どうしてなのかと尋ねると、「添い寝をしてあげたいから」と。その言葉でお医者さんの気持ちがいっぺんに変わったんですね。脳死の人を看護する家族の心情に触れて、移植手術ができなくなったのです。

「生のみが我等にあらず。死もまた我等なり」と清澤満之先生が言われます。普通では「死は我等に」まで入っていないんでしょう。死んでも人のためになったというけど、本人自身が本当に生を全うしたのか。そこまで家族は、いのちについて語り合えたのだろうか。

脳死は、身体上でも死に切れていない状態である。身体は死に切っていないのに、精神の上では、生を完結して死に切る決断(「死もまたわれらなり」という信念)が要請されているのではないか。これは賜ったいのちの一分を臓器として提供する方も、提供される方も関係する宗教的死生観に関わる問題であります。

臓器の不良部品を新しい部品に交換すれば人生は完結するのか。部品を交換すれば空しく過ぎる人生が功徳に転ずるとは限らない。また健康な部品を提供したから、これこそ菩薩の利他行と言えるのかどうかです。

いのちをどう受け取るか

無縁社会の現代と言われるように、血縁・地縁・社縁が無縁化されつつあります。家族の関係が薄くなりつつあります。

一方、社会的ボランティアも叫ばれる時代です。臓器移植もその風潮に関係あるのかもしれません。しかし、「退院させて添い寝をしてあげたい」という情愛の煩悩も捨て切れません。

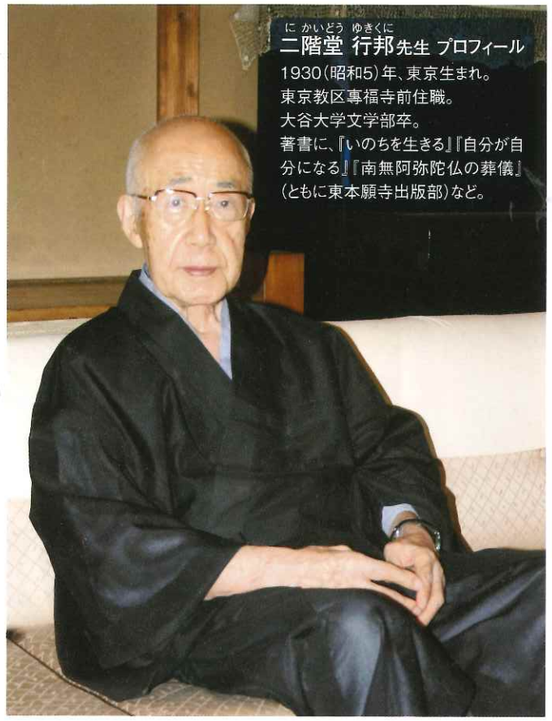
聞法会の時に、自分の奥さんのお母さんを亡くした人が言われるんですね。葬式の時、手を合わせて「なんまんだぶつ」を称えた。その時ふっと気がついて、自分は念仏を称えているが、その念仏の受け取り方というか感覚と、毎朝お内仏の前に座って称えている念仏とが、どうもピタッと合わないと、真剣になって言われるんですね。死んでしまったらその途端に手を合わせて念仏を称える。世間ではそれはまったく疑問もなく行われていますね。

私自身も家内を亡くして、遺骸を家に移しました。翌朝起きて亡骸を見て手を合わせて念仏が称えられたかと言われると、称える気がしない、称えられなかったんですよ。僕にとって妻は死に切っていないんですよ。死につつある状態なんですね。念仏が自然に出てくるまでには少し時が経たないとだめだったんですね。遺骸を見ても手が合わされない。まだ生きている時の状態の続きだと思っていますね。

この死者に向かって念仏できない違和感は何だろう。本来南無阿弥陀仏は死者に向かって称えるものではないのでしょう。阿弥陀という如来の用らきに合掌念仏せざるを得ないものである。「親鸞は父母の孝養のために一返も念仏申したことなし」と明言する。

死者の追善供養のための念仏ではなくして、実は死別の悲哀に煩悩するしかない我に念仏申す他ないのです。

遺骸に向かって念仏しているようだが、実は煩悩不断の我に念仏申しているのではないかと思わされたことであります。（終）



二階堂 行邦先生 プロフィール
1930（昭和5）年、東京生まれ。
東京教区専福寺前住職。
大谷大学文学部卒。
著書に、『いのちを生きる』『自分が自分になる』『南無阿弥陀仏の葬儀』（ともに東本願寺出版部）など。

インタビューを終えて

庫裡にてのインタビューを終えた後、先生と一緒に本堂へお参りさせていただき、しばし、先生との雑談も。インタビューの時とは変わって、先生のお顔からは終始穏やかな微笑みを感じさせていただきました。

先生の口からは、「最近（自分の）身体の調子があまり良くないんだよね」と。そして「困ったもんだよ」と続く言葉には淡々とした口調の中にも静かな和らかさが…。

専福寺さんを後にする私たちを見送ってくださる先生のお姿を見ながら、「仏教とはあるがままを受け入れる教え」というある師の言葉が浮かんできました。

長時間にわたってのインタビュー、先生、ありがとうございました。

なお本文は、インタビューでお聞きした言葉に、後日、二階堂先生から加筆・訂正をいただいたものをお届けいたしました。

訂正とお詫び

前回103号の「二階堂行邦先生にインタビュー①」の欄にて、以下の誤りがありましたので、この紙面にて、訂正とお詫びを申し上げます。

①2ページ4段目最後の行
……「者」→「もの」
②4ページ1段目最後の行
……「・末法」を削除
③4ページ2段目12行目
……「本質」→「本願」
④4ページ3段目10行目
……行頭の「し」を削除
⑤4ページ3段目25行目
……「ある」を削除

吉崎御坊跡

～中興の祖「蓮如上人」布教の地～

吉崎御坊本堂跡

吉崎山から見下ろす北潟湖

昨年10月、吉崎別院（福井県あわら市吉崎）に参詣する機会をいただきました。吉崎御坊は本願寺教団において重要な役割を担った御旧跡であることは周知のとおりです。比叡山延暦寺などの迫害（大谷破却等）を受けて、京都大谷の地を逃れた蓮如上人は、1471（文明3）年7月、越前国吉崎に坊舎を建立し、1475（文明7）年8月に吉崎を退去されるまでの4年間、二度の火災に遭いながらもこの地を布教の拠点とし、本願寺教団再興に力を尽くされました。

思えば蓮如上人は幼い頃に実母と別れ、その母への思慕の念は後の人生に大きな影響を及ぼしたと言われています。経済的に苦しい時期に勉学と求道に励み、親鸞聖人の「教行信証」等々のお聖教を表紙が破れるほど繰り返し読まれたと言われています。上人のお仕事は、時代を超えて親鸞聖人の教えを分かりやすく説き示されたことであり、それは正に「当流の真実の宝と云うは、南無阿弥陀仏、これ、一念の信心なり」（『蓮如上人御一代記聞書239』）とあるように、「信心の回復・信心の再興」であったと思われます。多くの御文を執筆し、正信偈、和讃の開版をなさったのもこの吉崎でのことです。混迷と彷徨の中にある戦乱の時代の人々に「宗祖に帰れ」と声高に発信した地がこの吉崎であったと考えられます。

かつて坊舎があった吉崎山は、三方を北潟湖に囲まれた天然の要害で、高さ40メート

見玉尼の墓

※吉崎別院様の写真を一部お借りしました。

高村光雲作蓮如上人像

大谷派吉崎別院本堂

蓮如上人腰掛石

ルに満たない小高い丘は、今は国の史跡に指定され公園として整備されています。日本海に近く、大聖寺川と北潟湖が合流して日本海に注ぎ込む地点の南側であり、丘の下には国道305号が通っており、海・川・陸の交通の要衝でもあったようです。当時は、宗教都市の様相を呈し、北陸のみならず全国各地から、遠く奥羽からも参詣者が絶えないほどの賑わいであったと言われています。

丘に上ると高村光雲作の蓮如上人の銅像（高さ5メートル、台座約7メートル）のほか、御坊の本堂跡、上人腰掛石、上人の娘見玉尼の墓など多くの見所が点在し、それに加え春にはソメイヨシノやサトザクラが美しく咲く桜の名所でもあります。丘を下り麓右手に西本願寺吉崎別院、「嫁おどしの肉付きの面」で有名な願慶寺、大谷派（東本願寺）吉崎別院を見下ろすことができます。東西両別院はいずれも江戸時代（1740年代）に建立されたようです。

時間の都合で大谷派吉崎別院のみの参拝でしたが、宝物館の天守状の建造物は戦国時代の城塞を髣髴させるもので、鐘楼も二階建ての独特な形状のものでした。本堂に参拝し、夕暮れ時の夕焼けの美しさや、風光明媚な周辺の景色を楽しみながら吉崎をあとにしました。

宗祖親鸞聖人の御遠忌法要が間近です。今年も「蓮如上人御影道中」が執り行われます。吉崎別院での毎年の蓮如上人御忌（蓮如忌）厳修に合わせて、上人の御影を御輿に納め、本山と吉崎の間往復約520キロの道程を歩く年中恒例行事です。私たち一人ひとりが上人のご苦労とお徳を偲び、その御意をいただきつつ、「一人なりとも、人の、信を取るが、一宗の繁昌に候う」（『同122』）と「信心の獲得」に生涯をかけられた蓮如上人の実践に学ばねばなりません。（編集委員　尾畑英和）

別院鐘楼

別院宝物館

今を見る 今を問う No.4

「岐阜同朋」編集委員　松前一秀

最近、友達（都心部にある寺院の住職）からこんな話を聞いた。わりと懇意にしていたご門徒さんの死を、後から知らされたそうだ。つまりその友達には、葬儀の依頼がなかったということ。あるいは葬儀そのものが行われなかったということなのか？…。

コンビニや本屋で、最近の雑誌などを立ち読みすると、よく見るのが〝葬式不要論〟〝お墓不要論〟などとセットになって、葬式仏教批判、坊さん批判である。（ま、昔から言われてますけどネ…）

そんな記事を読みながらいつも思う。どんどん批判してくれ。やがて時代の篩にかけられ、〝本気な坊さん〟だけが残るだろう…。

俺？　真っ先に脱落するかも（爆笑）。

こんな葬儀、法要に追われる日々から逃げ出したいから（暴言）。（たまたま最近忙しいだけで、普段はヒマな田舎寺院なんだけどネ（笑））

やがて近い未来、ボクの住むこの田舎もどんどん葬儀や法要の形態も変わり、さっきの雑誌の記事のように「坊さんなんていらん！」という声が、より確かな波となって押し寄せるだろう…。

でも現時点、まだまだ葬儀の依頼がある。良くも悪くもお坊さんに「何か」を求めてくれる人が少なからずいるってことだ。

都会に遅れて〝坊さん不要論〟へと進む直前の最後の足掻きかもしれない。

ボクは今後、ジワジワと押し寄せるであろう【坊さん不要論のボリューム】に耐えられるのか？その渦中で何を伝え、表現していけるだろうか？

「葬儀を縁にして教えを学ぶ」など、ヒマで余裕があった時代の「戯言」なのだろうか？

でも、愚痴を言いながらでも、ため息をつきながらでもボクには、大切にしなければならない事がある。

それは日々、目の前に訪れるひとつひとつのことに正面から向き合い、本気で「教え」を求めてくださる皆さんと、テイネイに向き合う「場所」「時間」を大切にすること……。

MyBook Review

植木等伝 「わかっちゃいるけど、やめられない」

戸井十月・著

小学館　1400円＋税

植木等（1926～2007）の最晩年の〝声〟を採集。

植木の語る父親が実に面白い。ご存じ、父・徹誠（徹之助）師は大谷派の僧侶で、部落解放運動の闘士でもあった。そのため、治安維持法違反で入獄したり、各地に社会運動に出かけて寺にいないことが多かった。かわりにやむなく門徒まわりを強いられていたのが植木。戦争がはじまり、軍国主義一辺倒の時代に、門徒宅に行っては「戦争は集団殺人だ。必ず生きて帰って来い。なるべく相手も殺すな」と説いていたと言うから、捕まらないわけがない。植木は父・徹誠を「支離滅裂な男」という。

「無責任男」のイメージとは裏腹に実際の植木等は至って真面目な性格。

軽い調子のメロディーにいい加減な歌詞を乗せた「スーダラ節」を歌うことにかなりの逡巡があったようだが、父・徹誠師に相談すると「〝わかっちゃいるけど、やめられない〟は親鸞聖人の生き様に通ずる」と諭され、歌うことを決意。蓋をあけてみれば父親の言うとおり大ヒット。

決して悪事をしないと心に誓っても、縁によっては何をしでかすかわからない。わかったつもりでも、目の前のことに左右されやすいのが人間である。親鸞聖人も、ただ本願念仏のみといただきながらも、衆生利益のために三部経を千回読誦しようともしてしまった。

良きにつれ悪しきにつれ、〝わかっちゃいるけど、やめられない〟のが人間の本質なのかも知れない。

（KM・評）